

SEASON CLIMAX

2009 VOL.3



関西学生サッカーリーグ

1部リーグ

12チーム紹介!



後期の目標

優勝

取材・写真: ハヤシヒロヒサ
谷口達也

前期を首位で終えた桃山大。「春先のチーム状態を考えると、出来すぎの結果」と松本監督が語るように、予想以上の躍進を見せた。今回は、その原動力となった若い力に登場して頂きました！

—前期を振り返って、いかがですか？

中東「最初のほうはスタメンで使ってもらっていたのですが、途中から調子を崩して練習の段階からアピールできず、だんだん出れなくなって悔しかったです。得点できたのは良かったのですが、自分で納得できるプレーができたと思えるのは6節の阪南大戦ぐらいで、まだまだですね」

須ノ又「自分は何故かいつも最初は良くなって、途中から調子上がってくるんですよ。それで最後のほうに得点できて。今年は去年と違って落ち着いてプレーできました」

宮下「高校からずっとボランチだったんですが、前期リーグ終盤にサイドバックとして初出場



きました。実際にプレーしてみて、高校より前からいくサッカーで、よりプロに近い戦い方をしているように感じました」

—後期に向けて、チームでの戦い方の目標などを教えてください。

中東「前期は先制されてから逆転勝ちすることが多かったんで、後期は先制して完封勝ちする試合を増やしたいです」

須ノ又「前期は内容が良くないのに勝てた試合が多かったんで、内容的にも勝って当たり前のサッカーをしたいですね。今練習でやることを取り入れつつ、自分たちで考えるサッカーができれば。何より楽しめるサッカーを心掛けたいです」

宮下「前期で内容が悪くても勝てた勝負強さは武器だけど、後期は内容も伴った戦い方をしないとイケないと思います」

—個人での目標を教えてください。

中東「前期は試合に出るだけで満足してしまっていた部分がありました。競争が激しくて、今のままじゃベンチ入りも危ういんで、もっとアピールしていきたいです。コンスタントに力を発揮してチームに貢献できるよう頑張ります」
須ノ又「今までは、攻撃の起点になった時にボールを失ってしまうことが多かったんで、後期はそこを気をつけたいです」

宮下「前期はあまり何もできず、無難に終わってしまったので、チャンスを生かしてチームに貢献したいです」

松本監督が「今年のチームは結束力がある」と語るように、学年を越えた繋がりりとまとまりを感じさせる桃山大の選手たち。後期も今と同じ地位で終わることができるよう、全員で同じ方向を向いてひたむきなサッカーを貫き、更なるレベルアップを目指す。



MF 34 宮下航

FW 18 須ノ又諭

FW 36 中東優治

—マネージャーになったキッカケは？しかも2回生からされていますね？

サッカーが好きでしたし(浦和の阿部のファン)、高校の時にマネージャー経験があるので、迷ったんですが、やはりやりたいと思いました。

—首位に立っているチームの状況はどうですか？

序盤戦でドラマチックな試合が多くて、勢いに乗りました。

—マネージャー業をしていて感じる事は？

事務的な仕事が多い点は大変ですね。でも、チームの中で対話をして、和を作り出す事の手伝いが出てくると嬉しいです。

取材当日は、1人で後方業務をしている中、取材にまで応じてもらいました。しかし、高校時代からの慣れか手際が良かったです。さすがです。

笑顔でチームを盛り立てる
義富 彩





後期の目標

一戦、一戦、
戦っていく！！

取材：伊藤紗由里、寺島琴美
写真：伊藤紗由里、久住真穂

勝ち点20で2位。同志社は、勝ち点差1で首位桃山大を追う。タレント揃いの同志社攻撃陣の中でも、キレとスピードあるドリブルで特に注目されるのがMF7楠神順平だ。J1川崎フロンターレへの入団が内定し、後期リーグでの活躍に期待がかかる楠神に話を聞いた。

—入団内定おめでとうございます。契約書にサインされたのがご自身のお誕生日(8月27日)ということですが…

そうですね、たまたま近くが誕生日だったのでその日になりました。(誕生日だということは)そんなに意識してないんですけど縁起も良いと思うので…

—今回、川崎フロンターレへの入団を決断なさった理由は何でしょうか？

スカウトの方が試合に足を運んでくれたり、3年位目をかけて追いかけてもらったので…嬉しかったです。

—先日、8月24日には中村憲剛選手に代わっての交代でJ初出場も果たされましたね。

サポーターがすごかったです。スタジアムみんなが拍手してくれて、すごい声援でした。緊張しました。

—話は脱線しますが、楠神さんがサッカーを始めたきっかけは何だったのでしょうか？

Jリーグの試合でキングカズさんをTVで見てからです。少年団に入ったのは小学校3年生くらいからでしたが、幼稚園からボールは触っていました。その頃が一番触ってたんじゃないですかね。

—プロに参加してから何か変わったことなどありますか？

応援して下さっているサポーターの方々もいますし…自分のためだけのサッカーじゃいけないと思います。プレー1つ1つにも責任を持たなければ、という気持ちが強くなりました。

—見てほしいプレーを教えてください。

ドリブルですね、そこで負けたらいけないと思っています。チームのアクセントになれば…と思います。

—同志社でのプレーも残すところあと半年とになりました。

最後やし、全国にでなければいけないと思っています。自分が引っ張っていかなければという思いもあります。良いサッカーをして勝ちたいです。

—有難うございました！

同志社の12番目の戦士 名田麻里子・真田智里



い合うようにしてます」(真田)。辛いことも多いと言うが、「いざという時に支えてくれるのは部員、みんなあつての私です」。「支えてるんか、支えられてるんか分かりません」。そう言って笑う彼女たちも、間違いなく「12番目の戦士」だ！

総勢10名のマネージャーを代表し、名田さん(4回生)と真田さん(3回生)にお話を伺いました！

彼女たちの仕事は「グラウンド3割、事務7割。仕事に順位はつけられません」(名田)。水汲みやビブス洗いはもちろん、施設や予定の管理、OB会や後援会との連絡、HPの更新…と事務的な仕事も多い。「みんなそれぞれ得意・不得意があり、全員が完璧のマネージャーではありません。10人十色…だからこそお互いを生かし、補



MF 7 楠神順平

J 1 川崎フロンターレ入団内定！



後期の目標

関西制覇

取材: 谷川あす香、大六野剛柔、寺島琴美
写真: 関学スポーツ



前期リーグ終了時点で3位と、優勝・インカレ出場を狙える好位置につけた関学。だが、上位チームの勝ち点は僅差。混戦が予想される後期リーグ開幕に向け、チーム1の熱いハートを持ちどんなに苦しい時でもチームを支える高田博元主将に話を聞いた。

—前期3位という結果でしたが、振り返ってみてどうですか？

3位という意識はしてないです。上がだんごなんで、どこが勝ってもおかしくないし、どこが負けてもおかしくない状態。自分たちは夏しっかりやってきたので、自信持って1戦1戦戦っていきたいですね。

—課題は何でしたか？

プレスをもっと激しくすること、攻撃の崩し方、FWを起点にどうサイドへ展開するかなどチーム全員でボールをどう動かしていくかっていうのが課題ですね。

—前期は引き分けという結果が多かったように思いますが

引き分けを勝ちに、負けを引き分けに持って行けること、苦しい時にどれだけ粘れるかが、インカレ出場や関西制覇に大切になってくる。つめが大事やと思う。いいときにも反省して次につなげられるか、自分たちをいかに客観的に見られるかが大事。勝った1つ1つの試合の中からも、改善点を見つけていきたい。

—この夏に取り組んできたことは？

合宿や2部練習です。朝は走って、昼からボール使った練習をやりました。あと、『マイナス発言撲滅運動』もやりました！「しんどいな～」とか「だるいな～」とか、そういうマイナス発言をなくして、苦しい状況でも顔を上げて頑張れるチームにしたいと思って。技術面だけでなく、メンタル面にも取り組んできました。

—インカレへのプレッシャーはありますか？

キャプテンとして、OBさんを含め応援して下さる方々と直接お話する機会が多いので、そういった方々の期待というものを肌で感じます。ものすっごい心臓つぶれそうなくらい(笑)。でもキャプテンの俺が、下向いたり、期待やプレッシャーから目をそらしたらチームは負けてしまうし、自分がプレッシャーに勝てばチームも勝てると思う。期待やプレッシャーから目を離さず関学を背負って頑張りたいと思います。

—後期リーグに向けて

結果はどれだけチームがまとまれるかで変わってくると思う。みんながどれだけ関学のことを思って戦えるかが大切。この夏で1人1人がレベアアップしてきたし、負ける気はしきません。

「関西制覇」、「大学日本一」へ。高田主将の下、関学イレブンはさらなる高みを目指すー。



MF 10 高田博元

関学の太陽。強い求心力でチームを1つに！

2000人もの集客に成功した前期最終節、関大戦。選手のモチベーションの向上だけでなく、大学サッカー界の発展にもつながる大きな意味を持つ集客試合となった。

この一大イベントの成功を導いたのが、関学の主務を務める西真田祥志。「チームの目標達成のために動くのはもちろん、大学サッカーを盛り上げたい」。昨年からは学連などに働きかけてきた結果、電光掲示板を使っでの選手紹介や、チャリダーによるハーフタイムショーなどが実現。会場を大いに沸かせ、関関戦の新たな伝統を築き上げた。

「結果は運に左右されるかもしれないが、いいチームは運に左右されない」。結果だけでなく、感動を与えられる集団の実現に向けてー。後期、彼の動きが大きな鍵を握る!!

大学サッカー界屈指の主務 西真田祥志





立命館大学

昨年は入替戦にまでまわり、苦しいシーズンを送った立命館。しかし今年前半を首位から2ポイント差の4位で終え、見事に立て直した。

その立命館を支える超攻撃的左SB前野、中盤で攻守のバランスを取る加藤、ストライカーとして開花し始めた坂本に話を聞いた。

—前半戦好調の要因は？

加藤・前野「去年は守備が崩れていたの、そこを冬場から修正してきた結果です。」

前野「攻撃面でも、しっかりと繋ぐサッカーを意識していて、ある程度出来ました。それで、得点が増えて、失点が減りバランスが良くなったと感じています。」

—個人のプレーを振り返ると？

坂本「大学のレベル、例えばフィジカルなどに戸惑いはありましたが、多少は慣れました。」

前野「サイドバックなので、もっとオーバーラッ

プとクロスを意識しなければという思いです。」
加藤「僕の場合、途中出場などが多かったの、そこは悔しいですね。」

—後半戦に向けて必要な事は？

坂本「ストライカーですから、何よりも得点。後期はもっと出場して、得点をもっと取りたい。そのためにもう少し運動量を増やさないといけないです。」

前野「個人としては、攻撃参加回数のノルマを決めて勝負したい。後は、試合の中でリズムを失うこともあるので、その時にしっかり我慢して、リズムを取り戻すためにどう戦うかを意識したい。上位の強豪相手にずっと立命館のペースってわけにはいかないですから。」

加藤「まずは無駄なボールロストを無くす事から。そして攻撃に移ればワイドに展開して数的優位を築く。サイドで常に2対1の状況を作れるように考えてサッカーをしたい。それに何より、リスクを怖れない姿勢が必要。相手



後期の目標

リーグ優勝！

取材：ハヤシヒロヒサ

写真：UNN、ハヤシヒロヒサ

だって仕掛けてこないチームは怖くないはずですから。加えて、強豪チームはプレスが速いのでそれを剥がすための攻撃的なアイデアも不可欠です。前期や関東遠征でもその点は苦戦しましたが、課題として洗い出せました。」

—後期の目標は？

前野「もちろん優勝もありますが、まずは全国。僕たちの世代は全国を経験していませんから。立命館らしいサッカーという内容と、勝ち点3という結果を追い求めます。」

全国制覇も経験したが、その後2部落ちも味わう。ここ数年は思うような結果が残せていない立命館だが、全てのポジションにタレントも揃い、機は熟した。関西の頂点へ、そして全国へと邁進する。

チームを支えるマネージャー 中谷亜理紗・田中綾乃



中谷「選手と自分がキャッチボール出来ていると思えた瞬間。そこに喜びがあります。」

マネージャーだけでスキルアップミーティングをする彼女たち。その自発性が、チームを活性化させる。

—マネージャーになったキッカケは？

田中「サッカーが好きで、代表と遠藤のファンでした。将来サッカーに近い仕事をしたい想いもあり、現場を知るべきだと考えました。」

中谷「高校時代は音楽でスポーツを応援する立場でした。その時感じた皆で何かを成し遂げる事に憧れました。」

—やりがいとは？

田中「自分がチームと繋がっているなど、ふとした場面で感じます。そんな時は嬉しいですね。」



F W 3 8 坂本一輝

D F 5 前野貴徳

M F 2 4 加藤恒平



後期の目標

リーグ・インカレ・天皇杯

優勝

取材:ハヤシヒロヒサ、久住真穂

写真:UNN・久住真穂



関西大学

関大の目標は、優勝。それも関西学生リーグだけではない。インカレ、そして天皇杯の頂点を本気で狙っている。その志の高さは部員・スタッフ全員のモノ。今回は代表して守備の要である3人に集まってもらった。

—前期を振り返って

児玉「順位的には悪くなかったですし、総理大臣杯にも出場しましたが、満足はしていません。仮に11戦全勝していても満足していません。目指す先は天皇杯日本一であり、Jリーグクラブに勝たないといけないので、簡単に満足感には浸れません。」

宇佐美「気になったのは失点ですね。学生レベルで失点を重ねるようでは、上のレベルと戦えない。」

田中「自分の場合は、故障などもあり満足に出場が出来なかったのが、そこが残念でした。しかしユニバーシアード代表に選ばれ、経験が積めた事はプラスになりました。」

—関大のサッカーを表現するなら？

田中「全員攻撃、全員守備。そしてパスをしっかり繋ぐサッカーですね。」

児玉「例えるとするならガンバ大阪のポゼッションのイメージですかね。」

—それぞれがJリーグクラブの練習に参加されていますが、プロとアマチュア、違いは？

児玉「意識の持ち方ですね。プロでもアマチュア意識の選手が居ますし、アマチュアでもプロの意識は持てます。」

宇佐美「自分の持っている武器の使い方の上手さです。」

田中「一つ一つのプレーにおける精度の差ですね。」

—それでは後期の目標は？

児玉「もちろん結果としては優勝です。そしてピッチに出ている11人だけでなく、ベンチやスタンドで応援してくれているメンバー全員で

戦うという、真の意味での全員サッカーの実現です。」

宇佐美「(部員)160人で11人を相手にしているという気持ちを持って戦いたい。それと、相手に合わせるサッカーではなくて、常に自分たちからアクションを起こすサッカーにこだわりたい。」

田中「やはり全員サッカーですね。自分自身の国際経験などもその中にフィードバック出来ればと思っています。」

打倒Jリーグクラブを本気で狙う彼ら。だからこそ、向上の妨げになる安易な満足感は見せない。ピッチに登場する4回生は全員がプロ志望であり、それを包み隠さず、自分をアピールする素晴らしい食欲さも持ち合わせている。

サッカーにおいて結果は、運に左右される部分も大きい。しかし、ブレない関大は運をも味方につけて躍進するだろう。



DF 3 宇佐美宏和

GK 1 児玉剛

DF 2 田中雄大

昨年度より本格スタートしたスクールは、毎週日曜日の朝7時から約2時間、幼稚園～小学4年生くらいを対象に開催。コンセプトは「サッカーを楽しもう!」。学生主体で運営され、トップチームの選手たちもコーチとなって参加しているのだ。取材日は、夏休み明けで約30人の子どもたちと保護者、約25名の学生が参加。この日は、全員で関大体操～鬼ごっこ～ミニゲームなどが行われた。最後はお父さんもお母さんも含めて全員で試合!お父さん方は「疲れた～」と汗だくになりながらも、「最高の環境でやれて気持ちいいですね」と笑顔がこぼれた。リーダーの菊本拓志は「子ども達は身体能力が上がっていたり、学生も立ち振る舞いがしっかりしてきました。サッカーを通じてより良い人間関係を築きたいですね。」と話す。学生とこども。そして、大人。様々な相乗効果を生み出しているカイザーサッカースクール。今後の発展が楽しみである。

カイザーサッカースクール





阪南大学

昨年、鉄壁の守備をベースに2冠を達成した阪南。しかし、今年はスタートダッシュに失敗。何とか盛り返して6位に付けているが、前期は磐石の戦いとはいかなかった(4勝5敗2分の6位)。後期の反撃に向けて守備のキーマン3人に話を聞いた。

—前期は波に乗り切れませんでした、振り返ってみると？

井手口「勝負弱さ、試合運びの拙さが出てしまいました。去年の主クラス(西田⇒現横浜FC、野田⇒現ファジアーノ岡山、吉川⇒現愛媛FCなど)が抜けた事は、プレーの面ではそれほど大きな影響は無かったとは思っています。ただ、ここぞという時に点を取れなかったり、逆に失点をしたりと。」

朴「自分たちで自分たちの首をしめた感じですね。井手口からもあった通り、取れる勝ち点をこぼして行ってしまった。勝てるなど感じた試合を落としてしまった事が痛かったです。」

金「取りこぼしについては同感です。具体的な部分で言うと、DFラインの裏へ出されたボールへの対応が悪かったですね。去年のような無失点の連続は無理でも、もう少し守備に工夫が出来たのではないかと反省しています。」

—主力選手の卒業で、メンタル的な部分は変化がありましたか？

朴「試合中というより、練習を含めた様々な部分で、少しまとまりに欠けたかと思います。」

金「その辺りを意識して、自分たちの学年(3回生)からまとまりを考えて行動するようになりました。少しずつ調子を戻していけた理由には、そんな部分にもあると思います。」

—後期、どのようなサッカーをしていきたいですか？

井手口「まずは攻撃の時に、1対1を大切に。勇気を持ってどんどん仕掛けていくべきです。それが上手いかない時もあるので、



後期の目標

逆転優勝

取材・写真:ハヤシヒロヒサ

そこは粘り強く繰り返していく。」

朴「自分のポジションを考えた場合、積極的に攻撃参加をする事。攻撃に厚みを加えないといけませんから。守備の場面では、コーチングですね。声で守りを引き締めたいと考えています。」

金「受け身にならない事。どんどん自分たちから仕掛けるサッカーをしたい。そうすれば相手も嫌でしょうから。」

守備的なポジションの3人に話を聞いたが、最後は全員が「攻撃的に」という言葉を残してくれた。それが課題であり、同時に反撃のために絶対必要な事柄だという共通認識だろう。連覇への道は険しいが、戦力は揃っているだけに波に乗れば一気に上位を捲るだろう。

“サッカー大好き” 阪南大マネージャー 古川綾華・藤本みずき



—阪南を一言で表現すると？

藤本「団結力のあるチームです。」、古川「スタッフの人的魅力ですね。」

本当に“サッカーが好きだ”と伝わってくるマネージャーに、支えられている阪南です。

—マネージャーをはじめたキッカケは？

古川「もともとサッカー好きでした。大久保嘉人のファンですね。」、藤本「私もサッカーが好きな家庭で育ったので。親の影響でマルディーニが好きでしたから。」

—マネージャーという仕事について

古川「まるで苦に感じた事が無いです。喜びは、選手と共に精一杯力を出している事です。」、藤本「やっぱり選手が結果を出してくれると嬉しいですね。嬉し泣きしてしまうくらいです。」



DF 2 金泰弘

DF 6 井手口正昭

DF 3 朴帝宣



後期の目標

6位

大阪学院大学

取材:ハヤシヒロヒサ

前期はリーグ7位ながら、総理大臣杯に出場。2回戦で高知大に敗れたものの、健闘を見せた。2回生中心の若いチームながら、経験を積む中で逞しさを身に付けている。

今回は、後期リーグもチームの中心を担うであろう2回生の3選手に集まってもらった。

—前期を振り返ってみて

尾泉「今年から、コンスタントに出場出来るようになったのですが、最初はロングボールの多い展開に馴染めなかったですね。体格の出来上がった大学生がぶつかり合うので、力対力の勝負に負けそうになったりしました。でも、なんとか慣れてきました。学院のサッカーもまずはポストに当てて作るのですが、そこも理解出来てきました。」

平岡「自分の場合は、守備に追われまくりましたね。守備だけで疲れてしまって、攻撃まで余力が無い状態が多かったです。」

四ヶ浦「岡村さん(和哉。四ヶ浦と2トップを組

む)とのコンビで得点はそこそこ獲れました。でも、それ以外のプレーには不満が残りますね。」

—課題を挙げるとすれば?

尾泉「スタメンとサブの差が大きいと思います。サッカーは11人で戦えるものではないので、もうちょっと全体の底上げが必要です。レギュラーもポジションを脅かされるような、競争がチーム内で活発になれば良いのですが。」

平岡「個人的な課題になるのですが、得点に絡めてない。もっと数字としてハッキリ残る結果を出して、チームの躍進に貢献しなければいけないです。」

四ヶ浦「ゴール前で、泥臭くても構わないので狙い続けるのがFWの仕事。上手いところもありますが、まだまだメンタルが緩いです。集中力を高めていかないと成長は出来ません。」

—後期をどう戦いますか?

四ヶ浦「監督も言うとおおり、2回生が主体のチーム。もう自分たちが引っ張っていかないとはいけません。その意味で2回生がまとまりを見せてチームに勢いを与えたいです。自分は得点を積み重ねるのみ。」

尾泉「フィジカルが追い付いてない部分があるので、後期までに何とか高めます。個人的には左足が売りなので、左で魅せたいですね。」

平岡「もう少し技術的な部分をレベルアップして、試合の中でしっかり使えるようにしたいです。」

後期開幕に向けての記者会見でも、藤原監督は「2回生のチーム」を強調されていた。だからこそ、大院大の2回生は上の学年に付いて行くのではなく、中核としての働きが求められる。

今年は6位という現実味のある順位を狙う大院大。彼らのタスクも明瞭であり、その成長が楽しみだ。



MF 1 4 平岡大毅

MF 5 尾泉大樹

FW 5 3 四ヶ浦寛康

—マネージャーになったキッカケは?

サッカーが好きだった事が1つ(ガンバ大阪のファンで、明神とデコとバラックという渋い選手のファンだそうです)。それと将来、サッカーに携わる仕事をしたいので、絶対にマネージャーを経験しておきたかったからです。

—マネージャーになってみて?

1人なのでしんどいんですけど、楽しんでやっています。

—大院大のチームを言葉で表すなら?

皆が仲良く、良い意味で上下関係が無いですね。

大院大には久しぶり(初?)の女子マネージャー誕生。黙々と仕事をされている姿が印象的だった。たったひとりの女子マネージャーだが、田中さんには将来の糧になるはず。

チーム唯一の女子マネージャー 田中あゆみ





びわこ成蹊スポーツ大学

昨年はリーグ2位でインカレ初出場と成績を残したが、前期は終わってみれば8位。なかなか波に乗れない試合が続いている。後期に向けて巻き返しを図るびわこ大注目の2回生・3選手(DF石橋勇二、DF二戸将、MF朝津知大)が登場。今回は一問一答形式で答えてもらった。

—前期リーグを率直に振り返って

石橋「勝ちきれず、失点が多すぎました。」

二戸「正直、勝ちたかったです。」

朝津「怪我もあって、勝利に貢献出来ませんでした。」

—見えてきた課題は？

石橋「個人としてはスタミナ強化。チームは決定力の強化と、全員守備への意識向上です。」

二戸「DFの組織。失点19と多いので。」

朝津「90分間、走りきることです。」

—収穫はどこでしょうか。

石橋「経験を積めたことです。」

二戸「課題が見つかったことです。」

—この夏の取り組み

石橋「体力作り。」

二戸「ディフェンスの強化です。」

朝津「攻守の切り替え。」

—“びわこ”らしさとはどこですか？

石橋・二戸「走るサッカーです！」

—得意なプレーを教えてください

石橋「ロングキック。空中戦にも注目です。」

二戸「オーバーラップです！」

朝津「守備の意識の高さを見てください。」

—好きな選手は？

石橋「スティーブン・ジェラード」

二戸「シウビーニョ」

朝津「ベントナー」



後期の目標

インカレ出場 ベスト4へ！

取材・写真：久住真穂

—座右の銘はありますか

石橋「自分に勝つ」

二戸「一生懸命」

朝津「日々精進」

—後期への意気込みをお願いします！

石橋「全勝してリーグ戦優勝。そして、今年もインカレ出場です。」

二戸「まずは全勝を目標に。もちろん、インカレ出場もです。」

朝津「勝ちにこだわりたいと思います！」

今年は「なないろ世代」というびわこ大。夏の総決算でもある滋賀FA CUP(天皇杯予選)では地元のJFLチームMIOびわこ草津を破り、決勝でびわこ大の社会人チームとの対戦を制し、久々の天皇杯出場権を勝ち取った。後期は、七色に輝くイレブンたちから目が離せない。

BIWAKOスパルタンズ



*** 最後にとっておきの応援をひとつ。***

【シーサ、シーサ×9…、守り神！】これで、ピンチの時でも失点を防げます！！

後期は“BIWAKOスパルタンズ”とトモニ応援しよう！

ラテン系でノリノリの応援といえば、びわこ大。応援団の愛称は“BIWAKOスパルタンズ”。よくよく見ると彼らの叩く太鼓には、松田保総監督の似顔絵が描かれているのだ。実はこの太鼓、元々は赤色だったのを昨年のインカレ出場に合わせて、びわこカラーにペンキで塗り替え似顔絵を描いたのだという。「歌詞が面白いので、注目してみてください。そして、前期よりも多く勝利を。まずは応援から気持ちを込めて頑張りたい。」と熱く応援する石部竜太が答えてくれた。



DF 3 1 石橋勇二



MF 1 5 朝津知大



DF 2 4 二戸将



後期の目標

絶対残留

取材・写真：ハヤシヒロヒサ

5連敗という悪夢のスタートになった1部での戦い。早々に脱落する危険性もあったが、見事に挽回して9位で折り返し。櫛引監督が一貫して「絶対残留」を掲げるシーズン。シーズン中の選手へのインタビューでも、消極的ではなく「今年は踏み止まって、来年へ」という前向きさが窺えた。今回は、反撃の狼煙をあげるきっかけを作った、3回生3選手との対談。

—前期は正直、苦しかったのでは？

橘「そうですね。やはり1部での実績が無い上に、いくら昨年の上位チームとは言え、連敗は厳しかったです。気持ちが折れないようにするのに必死でした。もちろん勝負なので、負けない気持ちでは臨んでいるのですが、どうしても1つ1つの技術に差がありました。」

浦川「具体的には、スピードの差が大きかったですね。2部から昇格して来て、一番差を感じた部分です。当然、走る速さだけではなく、考える速さも含めて違うので、心身ともに緊張

感が高くなりました。でも、試合をこなす内に慣れて来て、手ごたえを感じ始めた辺りから、やれるかなという思いも伴ってきました。」

—ピッチの上でどのようなサッカーを意図して復調しましたか？

宮本「粘り強いアプローチを相手に仕掛け続けるところから入り、絶えずプレッシャーは掛けていました。上手くはまるようになったと思います。」

浦川「攻め込まれてしまえば、もちろん後ろでしっかり守ってカウンターですが、最初から引いて守る作戦は取りませんでした。試合開始からは、バスケットボールで言うオールコートプレスのように、一気にボールを奪いに掛かる姿勢を打ち出しました。」

橘「攻撃面では、サイドに起点を作ってからトップに楔を入れる、サイドアタックに持ち込む等の形も出てきました。」

—これからの後期の戦いは？

橘・浦川・宮本「絶対残留あるのみです。」

橘「前期で苦戦した上位から簡単に勝ち点3が奪えるとは思っていません。そこは地道に勝ち点1でも良いから積み重ねる事です。そして、勝てたチームには、良いイメージを持ったまま勝ち点3を狙って行きたいです。下位同士の戦いで敗れると、かなりキツくなりますからね。」

宮本「攻めて攻めて勝ち点3というのは現実的ではないので、守って速攻から勝ち点3を狙います。」

完全にリアリストの集団である大産大。しっかりと勝ち点計算と目標設定をコンプリートする過程を楽しみたい。



MF 10 橘章斗

MF 7 宮本健二

MF 8 浦川祐基

大産大の主務をしている原和也さんは気配り王子。私たちの突然のインタビューにも快く承諾してくれた。原主務は経理、マネの仕事もこなすスーパー主務であり、またAチームの選手という顔も持つ多彩な才能の持ち主。とにかくプラス志向で、真夏に咲くひまわりのような笑顔が印象的だ。

主務をするようになり、周りを見られるようになったというものの、「いい伝統に乗っかっただけ」だと謙虚な姿勢もみせた。忙しい仕事を完璧にこなす秘訣は『選手からの「ありがとう」の一言』だと話し、お互い必要不可欠な存在だと窺える。

今の大産大があるのも彼のおかげだと言っても過言ではない。

大産大のスーパー主務！ 原 和也





後期の目標

インカレ出場へ

取材・写真: 久住真穂

1部リーグ2年目のシーズンを迎えた大教大。前期は10位。選手層だけでいうと妥当な位置かもしれない。しかし、昨年とは違い試合内容は互角以上の戦いを繰り広げ、常に進化し続けている。前期の課題は主将・副将自らチーム分析を行い、選手間ミーティングも頻繁に開催。他大学の首脳陣からも一目置かれるチームの次世代を担う監督推薦4選手(DF山本翔太、MF鳥尾広輔、MF田中俊一、DF大庭慧之)に話を伺った。

—前期の率直な感想をお願いします

大庭「立ち上がりから、先制点を取ってリードしているのに、最後の20分で運動量が落ちて引き分けや負ける試合が多かったです。それでも去年は攻撃2:守備8で、今年は攻撃4:守備6と攻撃の比重が大きくなりましたね。」

—夏に強化したところは

山本「攻撃に重点を置いて、バリエーションが



増えました。サイドからの崩し、中盤でのつなぎ。自分はロングパスの精度を高めることも意識して取り組みました。」

—改めて、得意なプレーを教えてください

山本「みんなを落ち着かせること、そしてカバーリング。」

田中「攻撃を仕掛けていくドリブルですね。後期はドリブルからクロスの精度も高めて、5点は獲って得点に絡んでいきたい。」

鳥尾「ボランチなんで、中盤で走ることです。」

大庭「サイドバックなので運動量が豊富などころやオーバーラップですね。後期、2ゴール、6アシストを狙います！」

—ライバルはいますか？

田中「勝手に思っているだけですけど。。同志社の楠神順平選手です。」

鳥尾「僕は、サッカーやっている人全員がライバルです！」

—大教大の良さはどこでしょうか

鳥尾「みんなで考えて、行動できる。仲もよし、真面目です。そしてコミュニケーションを大切にします。」

—最後に、後期への意気込みを！

山本「いかに勝つか、が重要になります。波をなくして、安定した戦いをし、上位に食い込みたいです。」

カリスマ性のある大久保主将率いる「このチームで、どうしてもインカレに出たい」。監督はじめ、チーム全員から気持ちがひしひしと伝わってきた。DF大久保・MF三好・FW森原のポジションごとに核となるキーマンがいて、そこに今回インタビューに答えてもらった4選手たちのスパイスが加わる。

悲願のインカレ出場へ—大教大が“新たな歴史を創る”。



MF 16 田中俊一

DF 3 大庭慧之

MF 8 鳥尾広輔

DF 6 山本翔太

—主務として、心掛けていることは何ですか

林「報告・連絡・相談です。選手主体なので連絡は、早く監督や幹部に伝えるようにしています。」

小北「僕も同じです。早くしないと、チームメートから苦情のメールが来るので。僕は、それが恐いんです。」

—大教とは、どのようなチームですか

林「選手一人一人が何事にも考えることができるチーム。ヘッドワークでは他の大学には負けません。」

小北「やはり「チーム和」が良いですね。監督、コーチを含めてみんな仲がよいです。また「文武両道」をモットーに掲げているので、勉強の方にも力を注いでいます。」

彼らの言葉ひとつひとつから、真面目さが伝わってくる。サッカーはプレーだけじゃない。二人のような裏方に支えられ、チームがチームとして活動できることを改めて感じた。

ふたりの主務 林佑一郎・小北陽介





大阪体育大学

昨年、2部所属ながら総理大臣杯制覇。そして順当に1部昇格。しかし、守備的な選手が一気に卒業。しかもその卒業生たちがJリーグに入団するレベルであったため、守備の再構築に迫られ前期は大苦戦を強いられた。数少ない昨年からのレギュラークラスの3人に、巻き返りに挑む心積もりを尋ねた。

—前期を振り返ってみてください？

川西「パスをつなぐサッカーを志向したのですが、なかなか連携が上手いきませんでした。自分も点が取れていなくて、泥臭くてもシュートを決めたかったのですが。全体としても、やりたいサッカー、やろうとしているサッカーが出来なかったですね。」

村田「自分自身がケガで出遅れてしまい、ピッチに立つ選手がさらに経験の少ない選手が多くなり、苦しかったです。上手く波に乗れなかったのも、チームが活気付かないし、一度崩れてしまうとしんどいものがありました。個

人的には点も取れなかったです。」
藤春「守備が何とか踏ん張れば、試合として形にもなったのですが。ゼロに抑える事が出来なかったのは不甲斐ないです。他のチームは、個人のレベルの高いタレントが揃っているの、そこにも苦しみました。」

—ここからは反撃の後期になりますか？

村田「残留や降格という文字に怯えるのは嫌ですね。それらの文字を気にしないで良い順位まで、まずは持って行きたい。最初は、降格回避ありきです。来年も1部のピッチで戦いたいですから。そのためには、苦しい時に何が出来るかですね。個人の力で打破しても良いし、それが必要になる時もあるはず。それに気持ちで負けたら話にならないので、そこは強く持っていたい。経験を多く積んでいるのが、自分たち3人なので、その経験をチームに上手く還元出来るようにしないとイケない。」

藤春「自分は走る事が大好きで、オーバーラッ



後期の目標

優勝！

取材：ハヤシヒロヒサ、西田真生

ブを連発しても苦になりません。だから、守備を頑張った上でどんどんと攻めにも絡みたい。自分だけじゃないですが、ハードワークを大切にしないと、生き残れないですね。」
川西「得点を取り、相手がどこであろうが、なんせ勝ち点3。こだわります。」

関西選抜にも選ばれている3人。さらに上のステージで戦う才能があるだけに、ここでの躓きは許されないと気持ちは伝わって来た。チーム力に個の力をブレンドして、上位へ向けて強行突破なるか。

「あくまでゴールは、インカレであり、優勝に置く」と言う北村コーチ。モチベーションや目標を低く設定せず、取れるだけの勝ち点を奪い取るために試合に挑む。

女子にも注目！



武庫川女子を下し、国立の地に立つことを誓った前田主将。今後は女子サッカーにも目が離せない。！

大体大は男子だけでなく、女子サッカーにも力を入れている。毎年国立に顔を出すほど常連、一昨年は優勝するほどの実力を持つ。

春季リーグはライバルの武庫川女子に続いて2位。このことについて前田恵理子主将は「負けてよかった」と真剣な顔つきで話す。気持ちの余裕から生まれた大きな壁。ミーティングでさらにチームをまとめ、新たなスタートを切った。残りの大学でのサッカー人生を「燃え尽きたい」と話すストライカーの目は、もうすでに燃え上っていた。



DF 5 藤春廣輝

FW 10 川西翔太

MF 8 村田和哉



後期の目標

一部残留

取材・写真: 谷口達也、蓮蔵亮平

前期リーグを2勝6敗3分とし、最下位で折り返した京産大。昨季の同時期に比べ順位を一つ落としているが、この取材中は選手達や監督からリーグ最下位の焦りは感じられなかった。むしろ後期リーグでの巻き返しを確信させてくれるような意気込みがひしひしと感じられた。今回の対談は、京産大3回生の中心メンバーFW小笠原、SB市川、CB吉川が後期リーグへ向けて熱く語ってくれた。

—まず前期リーグについて振り返りをお願いします

市川「初戦(桃山戦)が勝てなかったのが痛かったです。初戦に勝っていれば勢いに乗っていたと思うんですけど・・・。」

吉川「前期は全試合が京産らしくなかったです。後期はもっとらしさを出したいですね。」

—個人的にはどうでしたか

小笠原「結果がなかなか出なくて・・・。エゴばかりが出てたと思います。」

市川「チームのために試合終了までやりぬきたいです。」

吉川「前期は無失点試合が1試合もなかったのが悔しかったです。後期はもっと無失点試合を増やしたいです。あと、関西選抜に選ばれたことは嬉しかったですね。でも、まず京産として結果を出さない。」

—夏の練習内容について聞かせてください

市川「今年も陸上のトラックとか、宝ヶ池の周りを走りました。」

小笠原「去年の夏休みよりも走ってます！」

吉川「でも走ってる内容は量より質をイメージしてますね。」

—後期リーグに向けて、個人の目標を聞かせてください

小笠原「まず点を決める。それとフォーメーションが新しくなるんで、早く対応して結果出したいです。」

市川「セットプレーを任されてるんで、1試合に1アシストしたいと思っています。あとはチームのためにどれだけ動けるかですね。」

吉川「無失点試合を多くしたいです。あとセットプレーからいいボールが来るんで点取も取りたいです。」

市川「(吉川選手は)関西の中でもでかい方ですから狙いやすいんですよ。」

古井監督が「練習量よりも、練習の質にこだわった。」と話すように今夏の合宿では、新たなフォーメーションに応じた戦術理解に加え、体幹トレーニングを取り入れるなど例年とは異なるものだった。また、合宿明けに行われたセレッソ大阪との練習試合では、2-0と敗戦を喫したものの、組織的な攻撃で試合を終始支配。この試合を通して得られたものは大きかったはずだ。後期序盤の4連勝を含む追いで、11位から6位へと順位を上げた昨季の再現を期待したい。

MGRに聞きました



京産大サッカー部を支える1回生マネージャー、目片悦子さん(左)、徳田奈央さん(右)のお二人に伺いました。

—まず、何故マネージャーを始めたんですか？

目片「高校までバレーボールやってたんですが、大学では支える側になりたかったので。ガンバ大阪の試合を見に行くと、スタジアムの雰囲気が好きになってサッカーを選びました。」

徳田「私は将来ホペイロという仕事に就きたかったので始めました。自分が好きなサッカーで、他の人を楽しませられたらと思って。」

—チームのために心掛けていることは？

目片「笑顔かな(笑)」、徳田「選手の気持ちを考えて動くことですね」

キャラクターは対照的なお二人でしたが、仲の良さが伺える素敵なお二人でした！



FW 10 小笠原佑生

MF 5 吉川拓也

DF 6 市川恭平



関西大学カイザーサッカースクール
Photo: Maho Hisazumi

■企画編集

フリーライター 久住真穂
フリーライター ハヤシヒロヒサ
UNN学生報道連盟 寺島琴美・西田真生
関学スポーツ 谷川あす香・大六野剛柔
同志社スポーツアトム 伊藤紗由里
京産大アスレチック 谷口達也・蓮蔵亮平

この冊子はプレス有志によって制作されました。

■関西学生サッカーの様々なをお届けしています！

【関西学生サッカーPRESSブログ】

<http://ameblo.jp/kss-press/>

[関西学生サッカーPRESS]で検索！

携帯からも見ることができます。



■発行協力

関西学生サッカー連盟



■「2009 SEASON CLIMAX」のカラー版は
学連HPにて公開中！下記URLへアクセス。

<http://www.jufa-kansai.jp/>

■試合情報、結果速報は

学連HP・携帯サイトでチェック！

<http://www.jufa-kansai.jp/kei/top.html>

